

# 魔法科高校の劣等生~元 双星の陰陽師~

アレハレ無双

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

かつて双星の陰陽師に選ばれ、婆娑羅すらをも圧倒した最凶の陰陽師、獅子宮陽馬は双星の片割れ、神谷伽耶が死ぬ際に伽耶の手により封印される。

それから29年後、婆娑羅の増加や新たな双星の陰陽師の発覚を踏まえ、土御門有馬の手により封印が解放される。

横浜騒乱編まではアニメ浴いです。

# 目次

入学編	プロローグ
1 話	1
2 話	30

# プロローグ

??? 「さあもう29年も経ったよ。休暇は充分だろうか？目覚めのときだよ」

髪の毛はまだ20代でも通用しそうな見た目の男が結晶の中にいる青年に向かって術を使う。

ピシツ・・・パキン、パキン・・・ガララツ

??? 「やあ、お目覚めかな？獅子宮陽馬」

髪の毛の長い男が結晶から出てきた青年に向けて語りかける。

陽馬 「有馬か・・・俺は何年眠っていた？」

有馬 と呼ばれた髪の毛の長い男が答える。

有馬 「だいたい29年だよ。ボクももう45だしね」 H A H A

と、有馬はいつも通りのハイテンションでおちやらけたように言う。

陽馬 「君は相変わらずハイテンションだね。・・・伽耶は？」

陽馬の質問で有馬のハイテンションが瓦解する。

有馬「彼女は亡くなってしまったよ。君も最後は見ていたんじゃないのかい？」

陽馬「ああ、でも未だに信じられないんだよ。でも俺を封印した理由はわかる。俺の呪力は強すぎるからな。伽耶が死んだショックで暴走する可能性があったし、力を封じていた封印が無くなるからね」

有馬「そうだね。だがここ近年、婆娑羅が増えてきている」

陽馬「なに？」

有馬「それに新たな双星が見つかったからね。君の年齢と揃うのを待っていた。」

陽馬「なるほど、だから今俺の封印をといった訳か」

有馬「まあ、大きくいえば婆娑羅達に対する牽制を兼ねているから、学校は別れてもらうけどね」

陽馬「双星側には誰が付く？」

有馬「十二天将の朱雀と一応今白虎は不在だけど、白蓮虎砲を持っている清弦の娘が付くよ。・・・それと君に神託がくだされている。伽耶君の呪力を受け継いだ子が今年から魔法科高校の第一高校に現れるそうだよ。」

陽馬「!!」

有馬から神託の内容を聞いた陽馬は目を見開き、圧倒的な量の呪力が陽馬の体から溢

れ出す。

有馬「まあまあ、『落ち着き給えよ』」

有馬が言霊で陽馬の呪力を吹き飛ばす。

有馬「まあ、伽耶君程ではないがしばらくはボクが呪力を封印しておくよ」

陽馬「ああ、頼んだよ」

有馬「さてと、君が第一高校に通うにあたって色々と後ろ盾が必要だからね。君にはこれから、九島烈・・・老師の所と四葉に行ってきたらうよ。話はボクから通しておく。」

陽馬「老師はわかるが、何故四葉なんだ？」

有馬「今は真夜君が四葉家当主だからね」

陽馬「なるほど、わかった。先に四葉から行く」

有馬「フフフ、君ならそう言うと思って既に話は通してあるよ。」

陽馬「ん、ありがとう。じゃあ行ってくるわ」

陽馬は『飛天駿脚』を使い移動する。四葉家を・・・四葉真夜の呪力を目指して。

く四葉家く

葉山「お待ちしております獅子宮殿。ご当主がお待ちです。こちらへどうぞ。」

陽馬「久しぶりだね。葉山さん。案内ありがと」

陽馬は葉山に案内され、それについて行くと広い部屋に案内される。

陽馬「久しぶりだね真夜。」

真夜「ええ、本当に久しぶりね。29年ぶりかしら。」

陽馬「そうらしいね。それよりも、俺を第一高校の入試を受けられるようにしてくれ  
るか?・・・老師にも頼むが四葉が裏で動けばより簡単に事が運ぶからね」

真夜「そうねえ。あなたの力が衰えてなければいいで・・・しよう!」

そう言つて真夜が陽馬に向けて『夜』を発動する。

だかそれは次の瞬間、陽馬が少し呪力をだし『夜』を吹き飛ばす。

真夜「・・・流石ね。私の『夜』を札やCADも使わずに吹き飛ばすなんてね。」

陽馬「・・・これで、認めてくれるか?」

真夜「ええ。これで認めない訳にはいかないでしょう?」

陽馬「・・・助かる。・・・また今度はちゃんと挨拶しに来るよ」



陽馬はそう言い四葉邸をあとにする。そして再び飛天駿脚を使い、次は九島烈の元へ向かう。

く九島邸く

陽馬「・・・という訳で俺の第一高校を受験出来るようにして頂きたい」

烈「ふむ、君にはいくつか貸しがあるからな。致し方なからう。わかった。口添えをしておく。」

陽馬「ありがとうございます。」

陽馬と烈の交渉は思いのほかすんなり行き、陽馬は九島邸をあとにする。

く2ヶ月後第一高校入試試験日く

く第一高校試験会場く

陽馬（へえー、案外大きな第一高校つて。まあ有馬曰く1位にならなければなんでもいらいしいし、実技は点取れるかわかんねえから、筆記頑張らないとな。今日は写輪眼使わねえでいいよな。）

試験管「始め！」

ババツつと一斉に解答用紙に向かってペンを走らせる。

陽馬（え？嘘。こんなんでいいの？楽すぎね？まあ確かに俺はCADとか弄つてたりしたからアレだけどき。）

と、陽馬は試験終了時間の10分前に全て解答を書き終える

試験管「次！獅子宮陽馬！」

陽馬「はい。」

陽馬（やっと順番回ってきたか。1人凄いのいたからそれを下回ればいいんだろ  
う？）

と、1人で納得しつつ魔法を発動する。

陽馬（はあー。やっと終わった。あとは4月の入学式まで待てばいいか。）

陽馬にとつてはかなり簡単な試験だったので勝手に自分で受かったと決めつけ、入学の準備をしようとする。

数日後、合格と一科だと言う内容の知らせが来る。

## 入学編

## 1話

（第一高校）

??? 「納得できません！何故お兄様が補欠なのですか？入試の成績はお兄様がトップだったじゃありませんか！本来なら私ではなく、お兄様が・・・」

??? 「深雪、お前がどこから入試の成績を知ったのかはこの際置いておくとして・・・こは魔法科高校なんだ。実技が優先されるのは当然のことだろう？」

第一高校の制服を身にまとった少女と青年が言い争っている・・・と言うよりただを捏ねる妹を兄が宥めている。

第一高校の制服ではあるものの、この2人の着ている制服には男女の差ではない明確な差が存在している。

それは、第一高校のエンブレムが入る部分。少女の方は八枚の花弁のマークがあるが、青年の方にはない。

これが、少女の熱弁にさらに油を注ぐ原因となっている。

兄をかなり尊敬しているのか兄の成績が1番だと言う主張に熱が入る『深雪』と呼ば

れた少女の話を遮り『お兄様』と呼ばれた青年、『司波達也』が諦めたように深雪を宥めようとする。

深雪「そんな覇気のないことでどうしますか！勉強も体術もお兄様に叶うものなどい  
るはずがないではありませんか！それに本当なら魔法だって・・・」

達也「深雪！」

達也は深雪の言った『本当なら魔法だって』と言うのセリフを聞いて少しばかり声を荒らげて続く言葉を遮る。

達也「・・・それは口にしても仕方の無いことだ。」

深雪「も、申し訳ございません・・・」

そう言つて落ち込む深雪を見て達也は深雪の頭を撫でながら励ましの言葉をかける。

達也「・・・深雪、お前の言葉は嬉しいよ。俺は怒ることが出来ない代わりに、お前  
がこうして怒ってくれているから俺はいつもそれに救われている。」

深雪「・・・嘘です。」

達也「嘘じゃない」

深雪「嘘です。お兄様はいつも、私を叱ってばかり・・・」

達也「嘘じゃないって。でもお前が俺の事を考えてくれているように、俺もお前のこ  
とを思っている。」

深雪「そんな・・・お兄様・・・『想ってる』だなんて・・・」

達也（確かに言葉はあっているんだが・・・意味が違う方に勘違いしてないか？）

達也は体を振らせて悶える深雪を見てこんなことを考えていたがこれをチャンスとばかりに言う。

達也「深雪、たとえお前が答辞を辞退しても代わりに俺が選ばれることは無い。他の一科の連中から選ばれるだけだ。けど、俺は他の連中よりもお前の晴れ姿を見たいんだ。」

深雪「・・・分かりました。深雪の晴れ姿、ちゃんと見ていてくださいね！」  
と、言い深雪は入学式が行われる体育館へ向け走っていく。

達也（さてと、これからどうして時間を潰すかな。）

達也は深雪のリハーサルがあるため早く来てしまい、時間を持て余していた。するとそこに一人の青年が真っ直ぐこちらに向かって歩いてきていた。

く達也に話しかける少し前く

陽馬（さて、真夜の話しや入試1位の総代の付き添いで奴はもう来ているはずなんだけど……）

と、陽馬は『司波達也』を探しながら一校内を歩いているとそこに何やら話をしてい  
る男女が目に入る。

その男女の男の方こそが今まさに陽馬が探している人物だった。

くそして現在く

陽馬「……ねえ、君が司波達也君……であつてるよね？」

と、いきなり知らない青年に名前を言い当てられ達也は警戒する。

達也「……そうだか、君は？」

陽馬「俺は獅子宮陽馬だ。……君のことは真夜から聞いている。」

達也は『真夜』という人名を聞きより一層警戒する。

陽馬「まあここじゃなんだし、中庭にベンチがあるんだ。ちよつとそこに移動しようよ。」

達也「ああ」

達也は警戒しながらも陽馬について行く。獅子宮陽馬という人物を探りながら。

〈中庭〉

陽馬「うん、ここなら聞かれないかな。」

陽馬はそう言いながら、周囲に防音のフィールドをはる。

達也「俺の事を一体どこまで。どうやって知った？」

陽馬「うん、そのことも話そうと思つて呼んだんだ。君には俺のことも知っておいて欲しいしね。」

達也「・・・」

陽馬「まず先に俺と真夜・・・深夜の関係だけど、実は俺たち同年代でね。俺がこうしてここに入學してるのは、1種のコールドスリープみたいになつてたからなんだよね。で、真夜と深夜は俺の恋人だった人・・・『神谷伽耶』の親友とも呼べるなかだったんだ。あとは、真夜を大亜連合の奴らから助けたのが俺と伽耶だったからつてのもある。・・・だいたい教えて貰えた理由についても理解出来たかな？」

達也「・・・はい。充分です。」

陽馬「別に敬語じゃなくていいよ。・・・実際に俺今15歳で止まつてたから同い年



なわけだし。」

達也「・・・そうか。なら呼び方は司波でも、達也でも構わない。好きに呼んでくれ。」  
陽馬「OKだ。俺も好きに呼んでもらって構わないよ。達也」

と、ここまで話したところで防音のフィールドが消え去る。

すると、見計らったかのように1人の女性がこちらに向かつて話しかけてきた。

???'「新入生ですね？そろそろ開場の時間ですよ？」

話しかけてきた女性の腕を見ると手首の辺りに腕輪・・・CADが付いていた。

第一高校にて校内でCADの携行が認められているのは生徒会などの1部のみ、つまりはこの女性は生徒会等の可能性があるという事だ。

陽馬に取っては生徒会には注意するべき人物がいるため、あまり関わりたくなかったのだが話しかけてきた女性が自己紹介をする。

真由美「・・・当校の生徒会長をしています。七草真由美です。ななくさとかいてさ  
えぐさと読みます。よろしくね」

達也「・・・俺、・・・いえ、自分は司波達也です。」

陽馬「獅子宮陽馬です。」

七草真由美「・・・陽馬にとっては1番会いたくない人に会ってしまった。

故に、陽馬は何か逃げ出そうとする。

陽馬「もうそろそろ時間ですので、失礼します。」

陽馬がそう言って軽くお辞儀をし、会場に向かうと同時に達也も同じ様にお辞儀をし、会場に向かった。

↳ 入学式会場

陽馬「うわぁー、キレーに別れてるなあ。悪目立ちするのも良くないし、ここで別れようか。」

達也「ああ、そうだな。」

達也「・・・しかし、差別意識の問題は差別される側にもある・・・か。」

達也は上と下でキレイに別れて席に着いている一科生と二科生を見てそんなことを考えていた。

陽馬（あーあ、入学式なんて暇なだけで、退屈だな・・・。伽耶が居てくれたら退屈しないのかな・・・。）

と、陽馬が今は亡きかつての恋人の事を考えていると2人の女性がこちらに近づいて

来て、さらに話しかけてきた。

陽馬はそのうちの1人の呪力を感じて驚愕することになる。

??? 「あのく。隣は空いていますか？」

2人のうち、大きい方(いろいろと)が声をかけてくる。

陽馬「ああ、空いてますよ。」

ほのか「あ、ありがとうございます。・・・あの！私、光井ほのかって言います。それですつちが・・・」

雫「・・・北山、雫。・・・雫って呼んで」

陽馬(な!?)「・・・この北山って子の呪力は・・・か、伽耶のものじゃないか！だとしたら、有馬が言ってた人はこの子か・・・」

と、陽馬が驚きながら考えていると

ほのか「あの!・・・名前を教えて貰ってもいいですか？」

陽馬「あ、ああ。・・・俺は獅子宮陽馬だよ。よろしくね。・・・あと呼び方は好きに呼んでくれていいよ。」

ほのか「はい！こちらこそ、よろしく願いますね。陽馬さん」

雫「・・・ん。」

ほのかはきちんと反応を示し、社交的な対応をしてくるが一方で雫は反応は示したも

の、ほのかに比べるとかなり素っ気ない対応だ。これには陽馬も少し頭を悩ませる。  
『これより、入学式を執り行います。』

陽馬「お、始まるみたいだね。」

ほのか「そうですね。」

陽馬（・・・伽耶の呪力を持つてる子を見つけたはいいけど、そもそも陰陽師かどうかすらわからないしなあ。・・・それに、表情読みにくいし対応も素っ気ないからどうやって接したらいいかわかんないし。・・・憂鬱だなあ。）

陽馬が考え事をしている間にも式は進み、新入生の答辞となった。

『新入生答辞。新入生代表、司波深雪』

司会の生徒に名を呼ばれ、深雪が出てくる。そして壇上に置かれたマイクの前に立ち軽くお辞儀をし、答辞を述べ始める。

深雪「穏やかな日差しが注ぎ、鮮やかに桜がまう・・・」

陽馬（・・・あれが司波達也の妹且つ四葉の最高傑作。そして次期当主候補か・・・。

先程は達也と話していたからちゃんと見るのはこれが初めてだな・・・）

と、陽馬は深雪を見てその実力を測ろうと観察する。

そしてふと隣を見ると、ほのかがるで芸能人にでも会ったかのような視線を向けて

いた・・・

（校内）

ほのか「陽馬さん！陽馬さんは何組でした？」

入学式が終わり、IDカードの受け取りと共にクラス分けが知らされる。

陽馬「俺はA組だったよ。」

ほのか「あ、そうなんですね。私と雫もA組でした！これからよろしくお願いしますね！」

雫「・・・よろしく。」

陽馬「ああ、こちらこそよろしくね。」

ほのか「陽馬さんはこの後どうするんですか？」

陽馬「俺はホームルームに行くって言いたいけど、実は俺は陰陽師やってるからね。そっちの方でこれから用があるから、もう帰るつもりだよ。」

ほのか「そうなんですネ。じゃあまた明日です！陽馬さん」

陽馬「ん、そうだね。また明日、光井さん、北山さん。」

雫「陽馬さん。私のことは雫って呼んで。」

ほのか「私のこともほのかでいいですよ。」

陽馬「うん、わかったよ。雫、ほのか。」

と、ここまで話したところで陽馬は2人と別れ人がいない所へと移動する。

そしてそこで一枚の札を取り出し、「禍野」への門を作り中へと入っていく。

【禍野】へ入るとそこは殺伐としており、一般人はおらず代わりに「ケガレ」と呼ばれる怪物がいる。

陽馬「うん、ここ1ヶ月頑張ったかいがある。この辺はもう全然居ないね。」

そう、ここら辺一帯陽馬がリハビリを兼ねて1ヶ月かけ、ケガレを狩り尽くしているため今のところはケガレはここには居ない。

しかし、しばらく経てばまたここに群がってくるであろうがそれでも直ぐに狩り尽くされるだろう。婆娑羅が来さえしなければ。

陽馬（・・・今日はこの辺いないし、ここなら自由に術使えるから久しぶりに眼を使おうかな。・・・楽だし）

と、次の瞬間、陽馬の右眼に模様が浮かびそれが形を変えて繋がる。そしてその右眼の中心に渦のようなものが出来、それに吸い込まれていく。

く 【禍野】 陽馬の家の中く

何も無いはずの空間に突然渦が出来る。そしてその中心から一人の青年が出てくる。

陽馬（・・・やっぱ、早くていいね。眼をのりハビリにちょうどいいし、禍野から帰る時はこれ使うようにしようかな）

なんてことを考えながら、【現】に繋がる門を作りそこに入っていく。そしてそのものの先は陽馬の家の自室だった。

陽馬（・・・面倒だけど、伽耶の呪力持つてる子見つけちゃったし、有馬に伝えないとな・・・）

と、少し憂鬱になりながら携帯端末を使い有馬を呼び出す。

有馬『はいはいはい、有馬だよーん。そっちからかけてきたってことは、見つかったのかな？』

陽馬「ああ、見つけたよ。名前は北山雫。幸いなことにクラスも一緒だ。」

有馬『おおー。それじゃあ最終的に君に例の封印を行えるようにこっちでも色々動いておくね？』

陽馬「うん、よろしく頼むよ。」

有馬『まっかせてよ！・・・それじゃあ・・・期待してるよ。』

ブツツ！つと通話が切られた。

陽馬「・・・今度こそ・・・死なせない・・・伽耶を助けられなかったからこそ・・・」  
そう呟きながらベットに寝転がり、そのまま眠りについた。

く次の日・1年A組教室く

陽馬（・・・それにしても、達也の妹は人気だな・・・）

陽馬は他人事（実際そうなのだが）のように外から目線で深雪に群がるクラスメイト達をまるで哀れむかのような目で見ていた。

と、そこでほのかが話しかけてくる。

ほのか「あれ？陽馬さんは皆みたいに司波さんの所に行かないの？」

陽馬「・・・ああ、正直な話幾ら入試1位の総代だって機械じゃないんだから感情はあるし、周りに群がられてあの場に縛り付けられてると可哀想に見えてくるし・・・何



よりああやって自分よりも上だつて決めつけて媚を売るような真似をする奴なんかは正味二科生の連中と変わんないよ。」

??? 「なにイ!! 僕らブルームをあんな出来損ないのウィードなんかと一緒にすると言うのか!!」

陽馬 「ああ、だつてお前ら魔法技能で劣るはずの二科生に入試のペーパーテストの魔法理論と魔法工学において負けているじゃないか。」

クラスメイト 「なんだと! 入試の成績は公開されていないはずだ! デタラメを言うな!」

陽馬 「デタラメじゃないさ。なんならこのことを教えてくれた七草会長に聞いたらどうだ?」

クラスメイト 「……クツ……」

森崎 「僕は森崎駿! 森崎本家に連なる者だ! ウィードの味方をして僕らブルームを蔑む様なやつは僕は認めない!」

陽馬 「……やつちやつち。あんまし目立たないようにしようと思つてたのに……ついつい本音を言つちやつたなあ。この際だし色々口撃でたたきつぶすか……」

森崎 「なんか言つたらどうなんだ!」

陽馬 「……あ! ごめん。考え事してて聞いてなかった。なんだつたつけ、モ

ブその1君」

森崎「……も、モブ……だと……！……君はどこまで人を馬鹿にしたら気が済むんだ！」

陽馬「だって正直な話、君の顔ふつーだし性格悪いしオマケに大して強くないだろうし、小物感満載だし。」

森崎「な！なんだと！いい加減にしろ！」

森崎は我慢の限界が来たのか殴りかかってくる。

しかし、大振りな為『眼』を使わなくても簡単に動きをみきれぬ。

そして冷静に回避して後ろに回り込み後ろから首を締めあげる。

森崎がやられたことに激情した他の取り巻き達が一斉に殴りかかってくる。

陽馬は森崎を取り巻き達に向けて突き飛ばし、『右眼』を発動させる。

取り巻き達が体制を建て直して殴りかかってくるもの、陽馬は避けようとしぬ。

ほのか&雫「ダメええー！」

誰もが陽馬に攻撃が当たると思った次の瞬間、攻撃がすり抜けた。

ほのか&雫「ええ？」

取り巻き達「……このやろおー！……」

取り巻き達が今度は一斉に殴りかかってくるがやはり当たらない。

1分ほどすると疲れたのか誰も殴りかかって来なくなった。

陽馬「……わかかった？君らじゃいくら束になっても俺には触れないし、こっちは陰陽師だからね。いつでも君らを殺せるんだよ。」

森崎「……な！お、陰陽師……だど!？」

陽馬「ま、そろそろ先生来るしみんな席に着いたら？」

森崎達「「くっ」」

〈昼休み・食堂〉

陽馬は先程クラスで騒ぎを起こしてしまったため、1人で食堂に来ていた。すると見覚えのある人を見つける。

陽馬「やあ、達也。俺も一緒に食事してもいいか？」

達也「俺は構わないが……」

???「あたしはいいわよ」

と、最初に赤毛のショートヘアの女性が快く受け入れてくれる。

???「わ、私も大丈夫です。」

次にメガネをかけた少しオドオドした女性が返事をくれる。

??? 「俺もいいぜ。」

最後にガタイのいい青年が返事をくれる。

陽馬「ありがとね。」

と、言い達也の横にほかの席からイスを取ってきて座る。

陽馬「それじゃあ、改めまして獅子宮陽馬です。俺のことは好きに呼んでくれて構わないよ。」

陽馬が自己紹介したのをきっかけに達也以外の3人が自己紹介をする。

エリカ「あたしは千葉エリカ。エリカって呼んで貰って構わないわ。」

美月「わ、私は柴田美月って言います。よろしくお願いしますね。」

レオ「俺は西城レオンハルト。レオって呼んでくれ！」

陽馬「了解、エリカに美月にレオね。OK、OK」

すると深雪がこちらにやってくる。

深雪「お兄様！」

達也「深雪。」

深雪「ご一緒してもよろしいですか？」

エリカ「深雪！ここ、空いてるよ。」

深雪「ありがとう。エリカ」

レオ「ええっと・・・誰？」

達也「司波深雪、俺の妹だ。」

レオ「へえ」

深雪「司波深雪「司波さん」です。」

深雪がレオに自己紹介している時に森崎達が乱入してくる。

森崎「司波さん、そんなブルームの裏切り者やウィードなんかと一緒に食事するより

こつちで皆で食べようよ。」

モブ子「そうよ、邪魔しちゃ悪いよ。」

エリカ「はあ？深雪はここで食べたいって言ってるのよ！それを邪魔する権利がアン

タのどこにある訳？」

森崎「それなら君たちがそこをどいてくれないか？所詮ウィードはスペアなんだ。僕

達ブルームに席を譲れ。」

陽馬「・・・はあく。さっきから聞いてれば・・・そんなだから小物感がいつまで

経つても取れないんだよ、モブその1君」

エリカ「ぷぷっ・・・なにそれ」

陽馬「いやーなんか見た目的にもふつーで特徴ないからモブ？」

エリカ「なにそれ！陽馬くんさいこ〜！」

森崎「な！・・・二度ならず三度までも・・・覚えてろよ！」  
そう言い残して森崎は立ち去る。

取り巻き達「二「お、おい！待てよ森崎」

取り巻き達が森崎の後を追いかけるが、それを見ていた陽馬は、

陽馬「イヤ！雑魚の悪キャラが言い残すやつじゃん。だっせえー！」

と、言つてエリカの笑いを取つていた。

く放課後・校門前く

美月「いい加減に諦めたらどうなんですか!？」

取り巻き「僕達は司波さんに相談したいことがあるんだ。」

モブ子「そうよ、ちよつと時間を貸してもらうだけなんだから！」

陽馬「イヤほんとになんなのきみら？そう言うのは事前にアポイント取つておいてからゆうものでしょ。」

森崎「そういうお前達はどうかなんだ！」

陽馬「俺達は、そもそも司波兄妹と一緒に帰るのに誘われただけだし。アポイントは達也がとってる上に俺は誘われた側なの。だから問題なし」

森崎「うぐっ……と、とにかく！司波さんはウィードや裏切り者なんかとじゃなく、僕達ブルームと一緒にいるべきなんだ！裏切り者やウィード如きが僕達I—Aの問題に口出しするな！」

美月「……同じ新入生じゃないですか。……あなた達ブルームが今の時点で、一体どれだけ優れていると言うんですか！」

美月がそう言った瞬間、森崎が笑いながら言った。

森崎「なら、どれだけ優れているか思い知らせてやる！」

森崎は腰に刺してある拳銃型CADを抜き、魔法を発動させようとする。

しかし、森崎が魔法を発動する瞬間に魔法式が吹き飛ばされ、さらにエリカの警棒で叩かれCADを手放してしまう。

森崎「うぐっ……クソっ！」

達也（あれは！術式解体！まさか、陽馬か！）

達也がそう予想した通り陽馬がCADを使わずに術式解体で森崎の術式を吹き飛ばし、発動を防いだ。

取り巻き達「こ、コノヤロー」

取り巻き達が次々と魔法を発動しようとしている。

ほのか「だ、ダメえー！」

雫「ほのか！」

ほのかが閃光魔法で止めようとするが、今度はほのかの起動式が吹き飛ばされ発動を止められてしまう。

ほのか「きゃ！」

雫「ほのか！」

真由美「そこまです！自衛目的以外の対人攻撃は犯罪行為ですよ！」

摩利「風紀委員長の渡辺摩利だ。事情を聞きます。全員ついてきなさい！」

陽馬「お断りします。さつきからその物陰に隠れていたんですから、事情は知っていますよね？」

摩利「な!?!気づいていたのか」

陽馬「それに・・・」

陽馬は達也に視線を向け、アイコンタクトをする。

達也「森崎を止めようと思えば止めれていたものをあなたは止めなかった。なのに何故ただの閃光魔法で止めようとしていた光井さんの魔法は止めたんです？」

陽馬「あなた方がもつと早く介入出来たにも関わらず、介入してこなかったために起



きたことでしょう。そんなことで時間を取らせないでいただきたい。」

真由美「そ、そうね、今回のことは私達にも不備があるため不問とします。今後はもうこんなことは無いようにね。」

真由美がそう言うのと俺と達也以外の全員がお辞儀をする。

摩利「会長がこう仰られているので今回は不問にする！．．．それと、君たちの名前  
は？」

達也「I—E、司波達也です。」

陽馬「I—A、獅子宮陽馬です。」

摩利「．．．．．覚えておこう。」

## 2話

↳放課後・校門前↳

渡辺摩利と七草真由美が去った後、森崎は達也に「僕はお前を認めない」宣言を叩きつけながら去っていった。

陽馬「……達也。……帰ろうか……」

達也「……そうだな。これ以上面倒事に巻き込まれたくないしな。」

ほのか「あ、あのっ！」

陽馬「ん？どうしたの？ほのか」

ほのか「えつと……さつきは庇ってくれてありがとうございました。……それから私達も帰りご一緒してもいいですか？」

陽馬「俺は誘われた側だからね。司波さんか達也に聞いてくれ。」

達也「俺は構わない。」

深雪「私も構いません。」

陽馬「それじゃあ、帰ろっか？」

ほのか「はい！」

雫「うん」

↳放課後・通学路↳

ほのか「改めまして、光井ほのかです。よろしくお願いします。」

雫「・・・北山雫。雫って呼んで。」

エリカ「OK。あたしは千葉エリカ。よろしくね、ほのか、雫。」

美月「柴田美月です。よろしくお願いしますね。」

レオ「西城レオンハルトだ。レオでいいぜ！よろしくな！」

達也「司波達也だ。司波だと深雪と区別が付けにくいから達也でいい。」

深雪「司波深雪です。よろしくね、ほのか、雫」

陽馬「あ、それじゃあさ俺も深雪って呼んでいい？・・・っと、俺は獅子宮陽馬ね。」

深雪「ええ、構いませんよ」

陽馬「ありがとね。」

と、自己紹介が終わったところで雫が気になっていた事を聞いてくる。

雫「陽馬さん。」

陽馬「ん？どしたの？雫」

雫「陽馬さんが教室でさっきのヤツらに殴られそうになった時になんで攻撃がすり抜けたの？」

陽馬「ああ、あれね・・・あれは俺の『右眼』の能力だよ。」

雫「『右眼』？」

雫が不思議そうに返して来たので、両眼に写輪眼を出してみせる。

陽馬「これが俺の眼、『写輪眼』だよ。・・・そして俺が使ったのはその上位にあたる・・・『万華鏡写輪眼』だ。」

雫「万華鏡写輪眼・・・」

陽馬「そ、この『万華鏡写輪眼』は右と左で瞳力が違うくてね。右眼の瞳力の名は『神威』これは眼を通して俺専用の空間である、時空間と現実を繋げることが出来る。これは汎用性が高くてね、例えば建物とか人とかを時空間に飛ばしたり、逆にこっちに持つてくることもできるうえに自分が時空間に飛んでマーキングを施した所に移動することも出来る。すり抜けは写輪眼の本来の力の1つ相手の動きを見切る力を使って当たる場所を予測して当たる部分だけを時空間に移動させるんだ。そうすれば時空間に移動している部分はすり抜けるように見えるってわけ。」

達也「なるほどな。そんなことが出来るのか・・・なら左眼の瞳力はなんなんだ？」

陽馬「左眼は『天照』と言って視点にに合わせて対象が燃え尽きるまで消えない黒い

炎を出す能力だ。・・・後もう一つ・・・これは両眼に違う瞳力の万華鏡写輪眼を持っている者のみが見える最強の防御であり最強の攻撃。『須佐能乎』。これは全力で使えば戦略級魔法に匹敵出来ると思うよ。ま、『天照』も使い方によつては戦略級に匹敵するかな？」

雫「・・・規格外だね・・・」

陽馬「まあ陰陽師のトップクラスは全員規格外のチートばつかだよ。」

達也「・・・それにしても、俺達なんか教えてもよかつたのか？」

陽馬「機密とかそういう意味なら問題無いよ。俺達陰陽師の敵は【ケガレ】であつて【人間】じゃないからね。」

達也「・・・なるほどな。・・・だがまだ何かあるんだろう？・・・この際だ。教えてくれないか？」

陽馬「・・・よくわかつたね・・・いいよ。・・・特別に教えてあげる。・・・万華鏡写輪眼にはさ・・・まだ上があるんだよ。」

皆「!!？」

陽馬「ただ、これは左眼だけしか開眼出来なかつた。その名は『輪廻眼』つて言うんだ。・・・けど、本来なら両眼に同時に開眼するはずなんだ・・・言い伝えによるとね。だけど片方しか開眼しなかつた分、俺の『輪廻眼』は特別なんだ。」

零「・・・特別？」

陽馬「そ、『輪廻眼』の能力はほぼ全部明らかになっていいるはずんだけど、俺の『輪廻写輪眼』はさらにもう1つ、『天手力』と言う術者と術者が視認したものや人を一瞬で入れ替える能力が備わっている。まあできる範囲は決まってるけど。で、『輪廻眼』本来の瞳力が『六道』と『輪墓』の2つ。」

達也「『六道』・・・『天道』『地獄道』『餓鬼道』『畜生道』『修羅道』『人間道』と、呼ばれるものだな。」

陽馬「正解。『天道』は引力と斥力を操作出来る。まあそれ以外は色々複雑だからまた今度ね。・・・『輪墓』は『輪廻眼』でしか感知、視認できない空間にいるもう1人の自分に攻撃させる技だけど、これは一定時間しか使えず使うとインターバルがある」

達也「・・・なるほど。その眼のことはよく分かったが、陰陽師とは本来、呪力と札を使い術を発動すると聞く。そのへんも教えてもらえないか？」

陽馬「OK達也。」

陽馬は何枚か札を取り出しながら答える。

陽馬「とりあえず基本的なことだけを言うと、俺達陰陽師はこの札と呪力を使い魔法士で言うところの事象改変を行う。例えば自身の身体能力を改変したり、武器の特性を変えたりだとかね。これを呪装と言う。まあ大体の陰陽師はこれで「ケガレ」を払って

いる。」

エリカ「あ、それならミキ・・・幼馴染に聞いたことがある。陰陽師の頂点に立つ12人は単独で地形を変えられるとか何とか・・・。」

陽馬「そうだね。陰陽師には『十二天将』と言うのがあってね。彼らは『十二天将』と呼ばれる特別な呪装札に選ばれた12人なんだ。・・・そのうちの1つ『貴人』に選ばれた現『十二天将』最強の男『鷗宮天馬』っているんだけど、そいつは『貴人』の呪装を使つて山1つ全力でなくとも一撃で吹き飛ばせるしあいつは札や詠唱をせずに事象改変を行えるからな。例えばズバーンつて言つたらものが切れる・・・とか。」

エリカ「な・・・なにそれ・・・」

陽馬「もう1つ教えておくと、そいつは俺らと同期で三校に入学したぞ」

エリカ「うっわ。今年の九校戦は大変そうだね。」

陽馬「そうなんだよなあ。あいつが暴走しないように他の十二天将か陰陽頭を呼ばなきゃダメだしなく。」

雫、ほのか、深雪、美月、レオ、達也「・・・」（規格外にも程がある！）

陽馬「そう言えば、達也は入試のペーパーテストは1位だったよな？それならCADとかいじれたりするのか？」

達也「ああ、深雪のCADは俺が調整しているからな。」

深雪「ええ、お兄様におまかせするのが一番安心ですから。」

達也「少しアレンジしているだけだよ。」

美月「それだって、デバイスのOSを理解する知識が無いと出来ませんよね?」

レオ「CADの基礎システムにアクセス出来るスキルも無いとなあ。たいしたもんだ……」

エリカ「達也くん、あたしのも見てもらえない?」

達也「無理。……あんな特殊な形状のCADをいじる自信はないよ。」

エリカ「アハッ、やっぱり凄いね〜達也くんは。」

達也「なにが?」

エリカ「これがCADだってわかっちゃうこと。」

エリカはそう言つて慣れた手つきで警棒型のCADを取り出す。

〜放課後・帰り道シヨップ前〜

レオ「刻印型の術式?」

エリカ「そうよ。だから柄以外は全部空洞なの。」

レオ「てことはサイオンを直接流し続けるってことだろ?よくガス欠にならねえな。」



エリカ「お、流石は得意分野。でも残念もう一步ね。振り出しと打ち込みの瞬間だけサイオンを流してやればそんなに消耗しないわ。兜割りなんかと一緒ね……て、皆どうしたの？」

深雪「エリカ」

エリカ「ん？」

深雪「兜割りって秘伝や奥義に分類される技術だと思うのだけれど……」

美月「もしかしてウチの学校って一般人の方が珍しいのかな？」

雫「……魔法科高校に一般人は居ないと思う。」

雫のド正論な発言に全員が黙り込む。

く翌日く

真由美「達也くくん！」

と、朝からハイテンションに真由美が達也と深雪に駆け寄る。

真由美「達也くんおはよー！深雪さんも、おはようございます。」

真由美のハイテンションに少しばかり引きながら達也も挨拶をする。

達也「……おはようございます……会長。」

深雪「おはようございます。」

だが、真由美はそんな達也のことを知ったことではないとばかりに話し出す。

真由美「深雪さんに少しお話があるのだけれど、今日のお昼はどうするご予定かしら？」

深雪「お昼はお兄様とご一緒しようと思っっていますが……」

真由美「ならちようどいいわ、達也くんも一緒に昼休みに生徒会室に来てください。

生徒会室には備え付けのダイニングサーバーがありますのでそこでお昼を食べましょう。」

深雪「お兄様……」

達也「いいんじゃないか。先日のお話の続きだろう。」

深雪「わかりました。……では会長、今日のお昼に生徒会室にお伺いします。」

真由美「ああ、それと獅子宮陽馬くんも呼んでおいて貰えないかしら？」

深雪「でしたら同じクラスである、私が伝えておきます。」

真由美「よろしくね。深雪さん」

深雪「はい。」

く昼休み・生徒会室く

真由美「どうぞ。」

達也&陽馬「失礼します。」

深雪「失礼します。」

と、深雪だけ後から丁寧にお辞儀をしながら挨拶をする。

その姿に摩利と小動物を連想させる女子生徒が一瞬見惚れるが、摩利の隣に座る大人びた女子生徒が咳払いをして現実に引き戻す。

そして、全員の分の食事が行き渡り真由美が話始める。

真由美「入学式で紹介しましたけど、念の為もう一度紹介しておくわね。私の隣に座っているのが会計の市原鈴音、通称リンちゃん。」

市原「私の事をそう呼ぶのは会長だけです。」

真由美は鈴音のツツコミを無視して紹介を続ける。

真由美「で、その隣がもう知ってますよね？風紀委員長の渡辺摩利。それからその隣が書記の中条あずさ、通称あーちゃん。」

陽馬（ん？あーちゃん）

あずさ「会長！お願いですから下級生の前であーちゃんは辞めてください！私にも立場というものがあるんです！」

陽馬（あくなるほどね。これはあーちゃんって呼びたくなるわ・・・）

真由美はあずさの抗議も無視して話を進めていく。

真由美「それともう一人、副会長のはんぞーくんを加えた5人が今年の生徒会のメンバーです。」

摩利「私は違うがな」

深雪「渡辺先輩。」

摩利「なんだ？」

深雪「そのお弁当は自分でお作りになったのですか？」

摩利「そうだが・・・以外か？」

達也「いいえ、少しも・・・普段から料理をしているかどうかは、その手を見れば分かりますから。」

摩利は達也に凶星を突かれ顔を赤くして手を隠す。

陽馬（ええつと、確かあの変態メガネ情報だと彼氏は千葉の麒麟児だったか・・・）

深雪「そうだお兄様私達も明日からお弁当にしましょうか」

達也「それは魅力的な提案だけど2人になれる場所がね・・・」

鈴音「兄妹と言うより恋人同士の会話ですわ」

陽馬（あ、コイツやっぱ絶対シスコンだわ・・・）

達也「そうですか？まあ確かに考えたことはあります。もしも自分と深雪の血が繋がっていなければ恋人にしないなど・・・」

深雪「はっ!?!／／／／／／／／」

あずさ「ええ?／／／／／／／／」

摩利「んん!?!／／／／／／／／」

鈴音「・・・／／／／／／／／」

陽馬「・・・」

達也「もちろん冗談ですよ?」シレッ

深雪& amp ;あずさ「え!?!」

達也「ん?」

深雪「い、いえ・・・あの・・・なんでもありません・・・」

陽馬（なるほど・・・妹は兄が良ければ恋人でもいいと思うレベルのブラコンか・・・）  
ブラックコーヒー買いだめしところかな・・・）

と、陽馬は呑気にブラックコーヒーの買いだめを決意していた。

真由美「そろそろ本題に入りましょうか。当校の生徒会長は投票によって選ばれます

が他の役員の選任、解任は生徒会長に委ねられています。その他の委員会の委員長も一部を除き、会長に任命権があります。」

摩利「私が委員長を務める風紀委員会はその例外の1つだ。風紀委員長は生徒会、部活連、教職委員会から3名ずつ選ばれ、その後内部選挙により決定する。」

真由美「うん。そしてこれは毎年恒例の事なのですが、毎年総代を務めた生徒は生徒会に入ってもらっています。」

陽馬「てことはつまり深雪に生徒会に入って欲しいと……じゃあなんで俺はココに呼ばれたんですかね？」

真由美「あなたには部活連からの推薦で風紀委員になってもらいたいからです。」

陽馬「なるほど……(なら布石を打っておくか……)多分会長辺りは知ってると思います。俺は陰陽師なので陰陽師としての任務もあります。てなワケで条件を付けさせてください。」

真由美「……条件を聞かせてもらえる？」

陽馬「司波達也の生徒会入り」

達也「なに!?(獅子宮陽馬……何を企んでいる……)」

深雪「え!?!」

鈴音「残念ながらそれは出来ません。校則により二科生の生徒会入りは出来ない決ま

りですの……」

陽馬「そうですか……残念です……なら条件を少し変えます。……そうですね……司波達也の風紀委員会入り……これでどうですか？」

摩利「そうか！風紀委員会には二科生を入れてはならないというルールは存在しない！」

真由美「陽馬くん！ナイスよ！」

達也「待つてください！……陽馬どういうことだ？……何故実技で劣る俺を風紀委員に入れることを条件にした？」

陽馬「だって俺の知ってる情報によれば風紀委員は皆脳筋ばつだからいかにも雑務やれそうな奴入れたかったから」

達也「……なるほどな……それにしても最初に敢えて俺を生徒会に無理なことを見越した上で推薦し妥協案として本来の目的を出すとは……中々腹黒いじゃないか……で、本音のところは？」

陽馬「……あちゃーバレてたか……本音ぶつちやけるとしようみ雑務めんどい、けどほかの人できない。それに陰陽師としての任務もある。けど委員会入りは回避出来そうにない……それなら達也に押し付けちゃえって腹積もり♪」

達也「……ハア……俺は風紀委員には入りませんよ。」

陽馬「風紀委員長」

摩利「なんだ？」

陽馬「実はですね・・・昨日校門で一悶着あったじゃないですか・・・その時に会長が起動式吹っ飛ばして発動を止めた子が使おうとしていた魔法が閃光魔法だって達也が見抜いてたんですよ」

摩利「なに!?それは本当か!達也くん」

達也「・・・(陽馬め・・・余計なことを!)・・・ええ本当ですよ。実技は苦手ですが分析は得意なので」

摩利「ますます我が風紀委員会に欲しくなった!」

真由美「ちよつとストーツプ!」

摩利「なんだ、どうした?真由美」

真由美「もうそろそろ時間が無いから本題に戻してもいいかな?」

摩利「あ、ああ。」

真由美「では改めて、毎年総代の方には生徒会入りしてもらっていますので、司波深雪さんあなたも生徒会に入って貰えますか?」

深雪「はい!私でよければありがたく受けさせていただきます。」

キーンコーン



摩利「おっと、もう時間か・・・達也くん、陽馬くん続きはまた放課後にしたいんだが・・・いいかな？」

陽馬「はい。」

達也「・・・わかりました。」

〔実習室〕

レオ「風紀委員!？」

達也「・・・そう・・・と、言う訳で陽馬のせいで放課後にまた生徒会室に行くことになった。」

レオ「そりやまた面倒なことになったな」

美月「風紀委員って危なくないですか？」

エリカ「つたく・・・勝手なんだから・・・」ボソツ

達也「エリカ、次エリカの番だぞ」

エリカ「え？ああ、ごめんごめん」

美月「エリカちゃん？（・・・どうしたんだろう?）」

エリカは実習用CADに手を置き台車を動かす魔法を発動する。

エリカ「……………よし！」

エリカの番が終わり達也の番になる。

達也は実習用CADに手を置きエリカと同じように魔法を発動しようとするがエリカに比べるとかなり遅い。

達也（……………遅い……………これが……………俺の実力！）

↓放課後・生徒会室↓

達也「……………やはり断ろう……………」失礼します……………司波達也です。」

深雪「……………司波深雪です」

陽馬「……………獅子宮陽馬です」

摩利「よつ、来たな。」

真由美「いらつしやい深雪さんに達也くん、それに陽馬くん」

生徒会室の窓際に立っている青年が振り向き深雪達の方に近ずきあいさつをする。

服部「生徒会副会長の服部刑部です。司波さん、生徒会へようこそ。」

服部の態度と達也を無視した為に深雪がムツとしていっていると同じく無視された陽馬が報復をする。

陽馬「アレ？確か副会長ってはんぞーくんって名前じゃなかったんですか？服部刑部

だどこにもはんぞーって着いてないじゃないですか。」

摩利「ああ、それは服部のフルネームが服部刑部少丞範蔵だからだ。」

陽馬「ああ、なるほど服部半蔵・・・だからはんぞーくんなのか！」

服部「渡辺先輩！フルネームを言わないでください！・・・学校には服部刑部で届出を出して許可されているんです！」

摩利「まあいいか、では達也くん、陽馬くん移動しようか」

達也「どちらへ？」

摩利「んー。風紀委員会本部だよ。色々見てもらいながらの方がわかりやすいだろうからね」

服部「待つてください渡辺先輩」

摩利「どうした？服部刑部少丞範蔵副会長」

服部「ッ！だからフルネームで呼ばないでください！」

摩利「じゃあ服部半蔵副会長」

服部「服部刑部です！」

摩利「それは名前じゃなくて官職だろう・・・お前の家の」

服部「今は官職なんてありません！学校にも服部刑部で届けて・・・ってそんなことが言いたいではなく・・・」

摩利「だつたらなんだ？」

服部「・・・その1年生・・・しかも雑草を風紀委員に任命することは反対です」

摩利「ほう、風紀委員長の私の前で禁止用語を使うとはいいい度胸だ！」

服部「取り繕つても仕方が無いでしょう。それとも全校生徒の3分の1以上を摘発するつもりですか？」

陽馬「俺は一科生なんですけどね？」

服部「君の入試の成績は一科生の中でも下の方だと記憶しているが？」

陽馬「・・・(チツ！小僧がゴチャゴチャほざきやがつて)・・・今は何故あなたが入試の成績を知っているかは置いて、言つてくれるね・・・世間を知らない青二才が！」

服部「フンツ！高校に入学したばかりの後輩に言われたくはないな！」

陽馬「この際だから言っておくけどこの世にはアンタよりも歳下でアンタより強いやつなんて沢山いる。アンタじゃ学校の成績とかではともかく、実戦じゃ俺や達也には勝てない。ここで断言してやるよ！学校や魔法協会が出す成績の出し方じゃやるだけ無駄だ、実戦じゃなんのやつにも立たない！余程天才なやつじゃなければね・・・。アンタ、実戦じゃ真つ先に死ぬよ？」

服部「な、なに？」

陽馬「アンタみたいにたかだか学校の成績だけで相手の実力の全てだと捉えているア  
ンタじゃ俺達は倒せない！」

服部「部を弁えろよ新入生！」

陽馬「なら俺達と模擬戦でもやるか？」

服部「いいだろう！身の程を弁える重要性を教えてやる！」

〈第3演習室〉

摩利「ルールを説明する。相手を死に至らしめる術式並びに相手に回復不可能な怪我を負わせる術式は禁止、直接攻撃は相手に捻挫以上の怪我を負わせない程度でなら許可する。それと素手での攻撃は構わないが武器の使用は許可しない。勝敗はこの条件の中で相手に負けを認めさせるか、私に続行不能と判断させるかで決する。以上だ」

陽馬「それでいいですよ」

服部「こちらも構いません」

陽馬（あの条件で構わないと言ったのはいいけどそれだと使える呪装もだいぶ限られ

てくるしどうしようかな・・・)

服部（魔法師同士の戦いでは先に魔法を当てた方が勝つ、奴は入試での実技は一科生の中でも低い方だと聞く。ならば単純な移動魔法で壁に激突させればいい。これで俺の勝ちだ。）

摩利「準備はいいか？・・・では、始め！」

服部が移動魔法を発動しようと魔法式を展開した瞬間、服部の魔法式がサイオンの塊で吹き飛ばされる。そして陽馬は突然魔法式が吹き飛んだ為驚き、呆然としている服部の後ろに回り込み手刀で気絶させる。

周りが混乱する中陽馬は摩利にジャツジをくだすように促す。

摩利「しよ、勝者獅子宮陽馬」